

誇りをもって仕事しよう

新年度を迎えるにあたり、輸出管理という仕事の誇りを考えてみました。

1. コンプライアンス要員の誇り

企業にはコンプライアンス関連の様々な仕事があります。多くの人が人事異動でその要員になるわけですが、自分の職務を語るとき、複雑な表情を浮かべる人が少なくないような気がします。

コンプライアンスは大事な仕事です。担当者本人も、経営陣も口にしてのことですし、それは全くその通りなのです。それでもどうも気分はすっきりしない。昨日まで敵と戦うのが仕事だった兵士が、部隊内部の監察係を拝命してしまったような。とでもいいですか。

人によって差はあるでしょうが、「俺でなくてもできる仕事」という思いがそこにあるのではないかと推察します。「大切なのは分かっているが俺でなくてもできる」という。(だから「大切な任務だ」を強調するような気がします)

実を申せばこの私、輸出管理稼業を何年もやっておりますが、上記のような感情を持ったことがありません。それは(「鈍感さのあらわれ」という声もありますが)この仕事に誇りを感じているからだと思います。ではそれは何なのか、という話をこれから致します。

2. それは高邁な理念(国際平和)か

輸出管理の意義という話になれば、当然、「国際的な平和・安全の維持」(外為法 25 条 1 項)に資するということがまず出てきます。そう、その通り。我々輸出管理屋は広い意味での「平和の戦士」なのです。そのこと自体は心にとめておく価値があります。

しかし日常の仕事でそれを実感する機会は多くありません。そのことを某社の輸出管理担当者がネットに書き込んだのを見たことがあります。(もっとも同氏は「この仕事の醍醐味は事故発生時に当局へ経緯書を書くときだ」と別の場で述べており、これはさすがに屈折しすぎかと思えます)

その反対に「不正輸出を起こしたら国際平和を損なうことがわからんのか!」と営業部員を叱りつける輸出管理担当者もたまにおります。しかしこういう高邁な理念を語る奴に限って、それを自分が威張る道具にしていることが往々にしてあるように思います。(戦争映画で「陛下拝領の何々を粗略に扱いおって」と威張りくさる下士官みたいな感じですね)

3. 社会的意義より会社の意義

どうも高邁な理念や社会的意義は(大事だけど)実感しにくい。それよりは「会社を守る」という考え方なら現実味があると思えます。

もちろん「守る」と言っても、「隠蔽する」とか「シラを切って乗り切る」という意味ではありません。事故を起こしたり、それを疑われるような振る舞いを避けることで会社が世

間から叩かれるのを予防するということです。それなら私もあなたも実感できるということです。

「社会のため」よりいくぶん実感しやすくなったとはいうものの、今度は「会社のため」として無闇に細かいことを言い立てる管理要員がいます。小さな案件でもすぐ管理帳票提出を求め、そのくせ提出された帳票の処理は表面的というような。すぐ笛を吹くレフェリーと言えいいでしょうか。いや、風紀委員の方が近いかな。

4. 「誰がやっても同じ」ではない

風紀委員の腕章を巻けば、今日から誰でもビシビシ仕事ができるということらしいですね。でもそれは腕章が仕事をしているようなものではありませんか？ え、なに？ 「私は制度の代理人として、法令と規定に則って粛々と遂行しているのみ」ですか？

でもそれには、自分を規制制度の代行者と位置づけることによって自らの存在意義を確認するという面がないでしょうか？ そしてそれは権威主義の人がはまりやすい落とし穴なのです。

というのは、輸出管理という仕事は「誰がやっても同じ」ではないからです。「ストライクゾーンに来たらストライク、外れたらボールを宣告するだけ」というものではないのです。

典型的なのが取引審査です。営業から回ってきた審査票に平和的な用途情報が書いてあれば自動的に（もとい！「粛々と」でした）マルにするということではザル審査です。逆に突っ込んで審査するにしても、どこまで掘り下げるのか、どのような現地回答なら可とするのか？ そして現地への教育効果を考えたら、どのような聞き方が望ましいのか？ 等々難しい問題が目白押しです。任務を果たすためには頭を使うことが必要です。「法令と規定に則って粛々と」だけで対応しきれものではありません。

誤解を避けるため付け加えておきますが、私は個人プレーを奨励しているわけではありません。その反対です。取引審査に代表されるように、輸出管理は、企業毎に頭を使って対応方針や流儀を作っていくものです。その要に位置する輸出管理要員が頭を使えない、「規定はこうなっていますから」だけの人間では、チームとして機能しないということを申し上げているのです。

「誰がやっても同じではない」仕事だということに思いを致せば、自ずと見えてくるものがあります。

5. 技能と見識で会社を守る

「腕章だけでこなす」ことができず、「誰がやっても同じではない」とすれば、自分を磨き、技能と見識を高めるよりありません。

もとより苦勞の多い道ではありますが、その苦勞を重ねつつ会社のみんなを守ろうとするのは、それこそ「誰にでもできること」ではありません。輸出管理に携わる者の誇りは、おそらくそこにあります。

他のコンプライアンス部門と比べて、より技能と見識の重要性を感じやすいのが輸出管理という仕事ではないでしょうか？ そういう意味で、あなたも私も、いい職種についてものです。

新しい一年、誇りをもってがんばりましょう。